

with Moon

ムーンホテルズ季刊誌
moon hotels infomation magazine

ウイズ ムーン 創刊号

ムーンビーチ誕生物語





ようこそ。
南国のもうひとつの
我が家へ

Welcome to your tropical home



特集

History of

Moon Beach

since 1975

1975年、沖縄のリゾートは
ここからはじまった。

1950年代に戦没者慰靈から始まった沖縄観光は、1975(昭和50)年の沖縄国際海洋博覧会を経て「トロピカルな楽園」へと大きくイメージを変えてゆく。沖縄リゾートのスタンダードを創ったホテルの誕生には、そんな時代背景があった。知られざるエピソードと共に、ホテルムーンビーチの物語をひもといてみよう。

ムーンビーチ誕生物語

ホテルムーンビーチ誕生の背景には、沖縄現代史のうねりがある



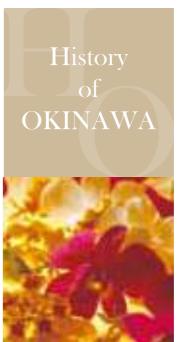
慰靈の島から亞熱帯の楽園へ

沖縄が琉球王国だった頃から、風光明媚な土地として知られていた恩納村。現在も景勝地として有名な万座毛(まんざもう)には、琉球国内を巡視していた国王が立ち寄り、景色を楽しんだと伝わる。ホテルムーンビーチは、前兼久という地域にある。兼久(かねく)は島言葉で砂地を意味する地名。南西諸島で、おおがねく大兼久や前兼久(まえがねく)など「兼久」のつく地名が複数あるのは、そのためだ。

琉球の農漁村地域には、「毛遊び(もうあし)」という風習があった。毛(もう)とは広場という意味だ。夜集落のはずれの毛に労働を終えた若い男女が集まり、歌垣のように即興の歌を歌い合って遊ぶ。現在のムーンビーチのチャペル前あたりが、前兼久の若者たちが集まる毛だったという話が残っている。中には、仲間の輪を抜け出して、月明かりの下、浜辺で愛を語るカップルもいただろう。美しい三日月の形をした浜は、誰からともなく月の浜と呼ばれるようになつた。

時は流れて戦争中、沖縄上空を飛ぶ米軍機

からは、白く輝く月の浜がよく見えたという。パイロットたちに「ムーンビーチ」と呼ばれるようになった浜は、戦後、遊びに来る米軍関係者でぎわうビーチになった。「月の浜海水浴場」として本格的に営業を始めたのは1957(昭和32)年のことだ。



アメリカ力統治下の
オキナワとは

沖縄がアメリカの統治下にあつた1945年～72年までを、沖縄では「アメリカ世(ゆ一)」「復帰前」と呼ぶ。琉球政府が置かれ、主席が行政のトップ。通貨は日本円→B円→米ドルと変遷し、72年の本土復帰で日本円に戻つた。

沖縄では「アメリカ世」「復帰前」と呼ぶには身分証明書(いわゆる「パスポート」)や入域許可証が必要で、誰もが自由に行き来できる制度ではなかつた。1950年代、年間1万人程度で推移していた沖縄入域者のほとんどは、商用もしくは戦没者の慰靈を目的としていた。1959(昭和34)年に日本政府が渡航制限を緩和してから、全国からの慰靈団が沖縄を訪れるようになり、1960年代には沖縄旅行といえれば慰靈の旅が主流だつた。

沖縄への入域者数が増えるのは、1972年(昭和47)、沖縄の施政権が日本政府へと返還されて以降だ。沖縄の本土復帰当時の日本は、所得倍増計画発表後に「モーレツ」な高度経済成長を遂げていた時代だ。東京オリンピックや大阪万博という国家的巨大プロジェクトが経済をけん引し、成功していた。その方

法論は沖縄でも引き継がれ、1975(昭和50)年の沖縄国際海洋博覧会(以降、海洋博)の開催に向けて、高速道路や港湾などが次々と整備されることとなつた。長いアメリカ統治で、日本本土に比べインフラの整備が遅れていたことも否定できない。

1953年
映画「ひめゆりの塔」大ヒット(主演・津島恵子)

1954年
日本航空による羽田→沖縄直行便が開設

1957年
定期便を開設

1959年
アメリカ航空会社が那覇と上海などを結ぶ

1960年
貨物は日本円→B円→米ドルと変遷し、72年の本土復帰で日本円に戻つた。

1964年
日本政府による沖縄渡航制限の緩和

1966年
東京オリンピック開催

1967年
所得倍増計画

1968年
「月の浜海水浴場」営業開始

1969年
日本政府による沖縄渡航制限の緩和

1970年
開催に向け、高速道路や港湾などが次々と整備されることとなつた。長いアメリカ統治で、日本本土に比べインフラの整備が遅れていたことも否定できない。

人々が集い、憩う木陰のように。 沖縄の風土から生まれたピロティ

そんな中、月の浜海水浴場に300室のホテル・コンドミニアムを開業するというプロジェクトが立ち上がりつた。設計は建築家の國場幸房氏だ。三日月型のビーチをそっと抱くようにウイングを広げる低層の建物。木陰のようすに涼しい風が吹き抜けるピロティ。外へと開かれ、砂浜や海と一緒に調和する。それは、ガジュマルの木陰に入々が集まつて思い思ふに過ごす、沖縄の風土から生まれた構想だつた。

沖縄初の本格的なリゾートホテル。どんな世界でも先駆者に求められるのは、前例のない道を切り開いて行くという役割だ。構想段階から、ムーンビーチにもそれが求められていた。

で実際に展示されていたのは、カリブ海の写真だつた。また、会場内には亜熱帯・熱帯のさまざまな植物が世界中から集められ、植えられた。これもまた、沖縄本来の自然の美しさではなく、漠然とした無国籍のトロピカルイメージを強調する仕掛けとなつた。沖縄を代表する芸術家の人、名嘉睦稔さんは海洋博をこう語り返る。

沖縄県のパビリオンである沖縄館では、1960年代に観光コンテンツの中心にあつた沖縄戦が、琉球・沖縄の長い歴史の中の一部として位置づけられた。観客のこころをくすぐったのは「大交易時代」など、新鮮なキーワードでわかりやすく構成された琉球史のロマンだつた。

慰靈から始まつた戦後の沖縄観光は、この海洋博を機に大きくイメージが変わつていく。ホテルムーンビーチ開業には、このような時代背景があつた。

「海、その望ましい未来」と題した 沖縄国際海洋博覧会が残したもの

皮肉なことに、日本の高度経済成長は1973(昭和48)年の第一次石油ショックで停滞し、海洋博は開催延期と会期縮小が決まつた。それでも沖縄経済の起爆剤としての海洋博への期待は誰にも止められず、現在か見ればちよつとした「海洋博バブル」が起つた。会場周辺では農地をつぶして駐車場が作られ、ショッピングセンターができる。海洋博のテーマは、「海—その望ましい未来」。1970年代に海という環境をテーマに掲げたことは評価されるべきだろ。だが、沖縄の美しい海に臨む会場の中、アクアポリス



ムーンビーチ開業当時のビーチ



ムーンビーチが開業する前の月の浜海水浴場

1972年
沖縄本土復帰、日本列島改憲論

1975年
沖縄国際海洋博覧会(通称・海洋博)開催

1970年
日本万国博覧会(通称・大阪万博)開催

1974年
東京オリンピック開催

1976年
所得倍増計画

1977年
「月の浜海水浴場」営業開始

1978年
日本政府による沖縄渡航制限の緩和

1979年
開催に向け、高速道路や港湾などが次々と整備されることとなつた。長いアメリカ統治で、日本本土に比べインフラの整備が遅れていたことも否定できない。

Interview I

海にあらわれる月の道が
ビーチまで続く。
それがムーンビーチ
最高の風景です

海洋博の時は新米デザイナーでした。展示物のレイアウトからPOPのデザインまでこき使われていましたよ(笑)。“未来の海上都市アカアボリス”を見て、未来はああなるのかと心配したけど、実際はなりませんでしたね。

オリジナルTシャツを手がける「HabuBox」1号店をムーンビーチ前に出したのが1982(昭和57)年頃。ムーンビーチとはそれ以来のおつきあいで、スタッフのTシャツや、販売用のホテルオリジナルTシャツを作りました。僕の版画を初めて買ってもらったのが、1992(平成2)年。

僕が一番好きなのは、冬のムーンビーチ。満月の夜、干潮の海に月が光の道をつくる。その月の道がビーチまでずっと続くんです。機会があったらぜひ見ていただきたい、最高の風景です。



名嘉 瞳稔
NAKA BOKUNEN
芸術家

1953(昭和28)年生まれ。伊是名島出身。絵画、イラスト、デザインを経て版画へ。一気呵成の影り上げと豊かな色彩の世界は情熱的でファンも多い。琉歌、絵本など表現の幅も広く、沖縄を代表する芸術家の一人だ。



◀ホテル所蔵の名嘉瞳稔作品
「波の花」1989作

開業前夜と海洋博ショック

開業前、分譲マンションとして売り出した部屋のセールスは不調だった。1973(昭和48)年の第一次オイルショックは好調だった日本経済を冷え込ませたばかりか、建築資材の高騰を招いた。プロジェクトの台所事情は厳しかった。経費節減のために部屋の壁を漆喰で塗ったり、ボウリングアーム後にダブついていた米松を安く買って内装に使つたり、とにかく知恵を絞り、経費を節減したという。ホテルのオペレーション部門では、本土のあるホテルから数十名のスタッフが派遣された。ムーンビーチ側のスタッフは彼らから運営ノウハウを学びながら、海洋博の会期をなんとか乗り切った。開業から半年間は連日満室状態が続いたものの、海洋博の閉幕と同時に予約は激減。1日に数組だけという日もあった。いわゆる海洋博ショックだ。海洋博の来場者数は約349万人で、目標だった450万人には遠く及ばない数字だった。閉幕後、海洋博を当て込んで投資した企業の倒産も相次ぎた。ムーンビーチでは翌年の夏に向かって客室稼働率は徐々に回復したものの、経営的には苦しい状況が続いた。一方、海水浴場としてのビーチには大勢の地元客が押しかけ、飲食物や三線を持ち込み、数千名の入場者であふれかえった。遊泳区域を設定し、バーベキュー器具の貸し出し

を始めたのは、この頃だ。地元客に愛されるのはうれしいことなのだが、スタッフの内心は複雑だった。リゾートホテルとしてこのままはやつていけないという危機感はスタッフ全体で共有するものとなつた。そこで、1976(昭和51)年の秋に、新たな営業戦略として東京営業所を開設し、関東地区でのセールス活動に積極的に取り組むこととなった。

翌年から、航空会社は「Let's kiss the sun」「トースト娘ができるがる」などのキャッチフレーズで、青い海とビキニの女性がビジュアルイメージとして登場する沖縄キャンペーンを打つ。団体包括旅行割引運賃が実施され、比較的手軽な料金のパッケージツアーも登場した。さらに、テレビドラマ「赤い衝撃」(主演・山口百恵)にも助けられた。沖縄ロケはムーンビーチを中心に行なわれたのだ。

海洋博で打ち出された無国籍な亜熱帯イメージは、それ以降沖縄観光の基本コンセプトと化した。青い空白い砂浜という南の楽園を求めて、若者たちが集まつてくるようになったのだ。さらに1978(昭和53)年には、ホテルの名を冠した旅行商品も売り出された。



(左)カフェテリア方式も当時としては画期的なシステム。(中)1975年(昭和50年)11月、ミスインターナショナル世界大会が海洋博で開催。ファイナリストはムーンビーチに滞在した

若者たちがサンセットを眺めるために ムーンビーチに集まり始めた



◀ 1975年7月
ホテルムーンビーチオープン
この年の沖縄への入域者数が初めて100万人の大台に乗り、155万8千人にも及んだ。閉幕と共に海洋博バブルははじけたが、関係者の尽力もあり、1977年から入域者数は再び伸び始める。



開業当時のパンフレット
県庁前に設置された、海洋博までのカウンタダウン日めくりカレンダー



海洋博翌年の沖縄土産のしおり。アクアポリス、海洋博記念講演内で営業していた遊園地のエキスポランド、ひめゆりの塔や師範健児の塔などの写真が使われている。

◀ 1975年
沖縄国際海洋博覧会とは
沖縄の本土復帰記念事業として本部町で1975年7月20日より翌年1月18日まで開催された。日本を含む36カ国が参加した。数あるパリオングループの中でも最大の目玉が、未来型海洋都市のモデルとなる人工島「アクアポリス」だった。

Interview 2

ロケーションそのものが
サプライズ！濃密な
空気感に魅せられた

1980年前後は東京に住んでいたので、夏休みの里帰りの度に、東京の仲間たちを誘っては沖縄を案内していました。コザから向かうと、山田の辺りが小高くなっていて、突然目の前に海が広がる。これぞ沖縄！という景色の中にムーンビーチが見えてきます。このロケーションが大好き。何回見ても、景色そのものがサプライズなんです。ムーンビーチは建物から室内のインテリアまで、すべてが洗練されていて、当時、東京の友人にも「どう？」と鼻が高かったのを覚えています。他のホテルにはない、濃密な空気感がありますよね。私にとっては、ハワイよりも濃いボリネシアみたいなイメージ。日没までビーチでゆっくり過ごした後は、着替えて踊りに出かける熱帯夜を満喫していました。



平良由乃
TAIRA YOSHINO

株式会社プラザハウス 代表取締役社長

1958(昭和33)年沖縄市生まれ。
1980年株式会社クシュカ入社。アクセサリーやインテリア雑貨など製造販売の企画・生産業務に携わる。1987年株式会社ロージャース(現プラザハウス)入社。商品開発・企画・広告・ショッピングセンター運営業務統括等を経て2009年4月より代表取締役社長就任。

「海洋博前から、ハワイみたいなヤシの街路樹がたくさん植えられました。在来を排除する思想に違和感を感じたけれど、当時は沖縄をトロピカルなイメージで彩ることは、観光振興のために良いことだとみんなが思つていた。今はまた少し違います。沖縄に本来あるも

のを見直すのに、時間がかかったのかもしれません。僕はムーンビーチに初めて来た時、モンパやガジュマルなどの亜熱帯の植物がたくさん植えられていることにハッとしました。島のものを植えるのは、この地であることを披露すること。それを知らされた思いでした。しかも外来種であるココヤシも、根元なんか太くたくましく育っている。

その“場”を認めて根を張る姿は、借り物じゃないという証拠です。この地の風水は動かない。この地の中で体現化してきたものが、外来のモノと調和することには感動しました

豊かな緑が生み出す濃密な空気感。それに魅せられてリピーターになるゲストも多い。ホテル内の植物はすべて自社農園で栽培。農園もチャレンジを積み重ねてきた。一時はランを大量に栽培し、全室にランの鉢を置いたこともあつた。現在は環境にも配慮し、農薬を使わなくとも花を咲かせるブーゲンビリアなどに力を入れている。

ケガの功名が生んだ植栽

植物たちが調和する癒しの風景。
ヒントは台風がもたらした



(左)1997年(平成9年)、「月の人魚」という物語を創出するプロジェクトに名嘉氏も参加。その際の作品がこの「人魚像」だ。今も岩場にある。(右)建設工事中のホテルムーンビーチ。



現在の首里城公園

首里城公園開園
<< 1992年

戦争で焼失した首里城跡にあった琉球大学が移転し、首里城正殿などが復元。首里城公園として整備開園。現在もまだ発掘と復元が続いている。

交通方法変更実施
<< 1978年

7月30日、アメリカ同様に右側通行だった車両を、日本式の「人は右、クルマは左」に切り替えるという一大イベントが実施された。沖縄では「ナナサンマル」の通称で親しまれ、今でも語り草になっている。この頃から後続のリゾートホテルが次々と誕生している。

交通方法変更実施

Interview 3

沖縄へ帰ってくると必ず遊びに行く場所それがムーンビーチ

18歳でミス東京に選ばれた頃、沖縄に帰ってくると母の友人が『ビーチでゆっくりしよう』と必ず連れて行ってくれるのがムーンビーチでした。何をするでもなく、ランチして、泳いだり、本を読んだり、ただゆっくりと他愛ないガールズトークをしたり。海と空、沖縄独特のゆったりした時間には、本当に癒されますよね。東京から沖縄に活動の拠点を移してからも、モデル仲間でビーチパーティをしたり、よく遊びに来ました。私の中では、海に行く=ムーンビーチ。実は海開きのファッションショーに出たり、仕事でもお世話になったんですよ。子どもたちもよく連れて来ましたね。昔のパンフレットにも、まだ小さかった娘と一緒に出ています(笑)。



山田 美加子
YAMADA MIKAKO

モデル、ウォーキングインストラクター
1958(昭和33)年沖縄市生まれ。
18歳でミス東京コンテストに優勝。故郷沖縄に帰った後、22歳で初代ミス沖縄に選ばれる。現在はブライダルなど幅広いジャンルで活躍。長女は山田優、長男は山田親太郎。



(左)マリンスタッフによる水上スキーのデモ (右) ウィンドサーフィンやヨットなどマリンスポーツも次々と導入(下)ムーンビーチに導入された水上バイク。日本で未発売のものを逆輸入した。(14ページ参照)

惜しみなく見せるということ

実は、設計者がピロティに込めた想いや哲学と、現場から生まれるニーズは必ずしも一致しない部分もあった。雨天対策としてトップライトを取り付け、一部風よけのサッシを設置したものそのためだ。ムーンビーチの斬新な設計は評判になり、後発のホテル設計を担当する大手ゼネコン担当者の視察が相次ぎだ。

マリンスポーツについても同じだ。求められれば、後発の業者にも新種目の開発や運営などのノウハウを公開してきた。また、沖縄県内のホテルとしては初めての本格的なクラシック音楽のイベントも開催し、クラシックファンの掘り起こしにも努めた。さらに、ホテル以外の業種にも、常に協力を惜しまなかつた。先述の平良由乃さんはこう語る。「私自身、ムーンビーチの空間が大好きなんですよ。だから、1994年に増設したプラザハウスフェアモールの建物を設計する時にも、何度も足を運んで、ずいぶん参考にさせてもらいました」

沖縄市のプラザハウスショッピングセンターは1954(昭和29)年創業。異国情緒の

あるオシャレな雰囲気で、本物志向の大人が買い物を楽しむ場として人気だ。増築された建物は、中央部に吹き抜けのスペースが広がるオープンモールになっている。

「図面ではわからない感覚をつかむために、ブールから上を見たらどう見えるかとか、逆に上から見たらどうかとか、私達が赴いて何回も研究するだけではなく、設計の細かいコンセプトなどについても直に教えてもらいました。こんなお願いにも快く対応してくれるのが、ムーンビーチなんですね」一社が得た教訓を全体で共有すれば、それは観光全体の底上げにつながる。経験をシェアする姿勢は、先駆者としての矜持の部分なのかもしれない。

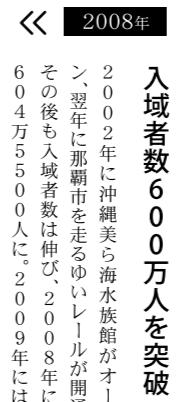
ムーンビーチから広がったものは、沖縄本島西海岸というリゾートブランドとして定着した。自社の利益だけを追い求めていては、決して創ることのできなかつたものが、ここ沖縄に根付いている。創業から38年、時間は過ぎたのではない。それはただ静かに、ムーンビーチの上に積み重なってきたのだ。ヴィンテージワインのように、成熟した空間がある。



(左)上空から見たホテルムーンビーチ。
(右)大小さまざまな規模で、音楽イベントが開催された。

沖縄リゾートは、ここから始まった。
先駆者として、経験をシェアする哲学

ミス恩納コンテスト。地元のミスコンとあって大勢の観客が詰めかけた。



1990年代後半から沖縄出身の安室奈美恵やSPEEDなどがブレイク。NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」で沖縄ブームはピークに。2003年には入域者数が500万人の大台に乗った。

「ちゅらさん」で沖縄ブーム

首里城や万国津梁館などを舞台に、先進国のトップが一堂に会する首脳会合が開催された。また、首里城跡、讐名園や齋場御嶽などが「琉球王国のグスク及び関連遺産群」としてユネスコ世界遺産に登録された。

九州沖縄サミット首脳会合

沖縄マリンスポーツ、ことはじめ

今では当たり前の光景を創り出したムーンビーチのチャレンジ。
その歴史をふりかえってみよう。

ムーンビーチの「はじめて」が、次のスタンダードになつた

それは、まだ日本に「マリンスポーツ」という言葉が定着していなかつた頃：と書くと昔話のようだが、1975（昭和50）年のムーンビーチ開業当時はまさにそんな時代。当時のムーンビーチでの遊びといえば、手こぎボートに足こぎボート、グラスボート程度だった。流れが大きく変わったのは1981（昭和56）年のこと。カタマラン（双胴船）のヨットを導入したところ、クルージングが人気になり。特におしゃれなサンセットクルージングは若い女性に大ウケした。朝尾清実テクニカルアドバイザーは語る。

「初代の水上バイクはカワサキ製の440ccです。まだ日本で発売されていなかつたので、デモ用のつもりでアメリカから逆輸入しました。550ccが出た時に、水上スキーを引っ張れるかも試してみたらできた。それまで水上

スキーは船で沖に出て引っぱるというスタイルでしたから、水上バイクで引っぱられるのは画期的でした。水上バイクなら波打ち際からエントリーできます。『あれ何？』『私にもできるんじゃない？』お客様の注目度が一気にアップしました。1日に70人のお客様が水上スキーをされたのが最高記録ですね」

日本初の水上バイクが、リゾートホテルのビーチでどのように使われているかを見ようと、メーカー側も何度も視察に来た。「メーカーとしては水上スキーを引つ張るという用途は想定していませんでした。550ccでも力不足で、体重70kg以上の人には引っ張れない」とリクエストもしました。

水上バイクは排気量を上げ、現在は1500ccとなつてます。

「ムーンビーチではマリンロデオと呼びましたが、バナナボートみたいな『引っ越しモノ』はムーンビーチから始まつた

と自負しています。だからこそ、今でも新種目導入の前には、徹底した安全テストを行なつてますよ」

1980年代後半は2台の水上バイクがフル回転。1986（昭和61）年はワンシーゼンで、約1万6千人がマリンロデオを楽しんだという。この頃、ビーチの賑わいは、ビーチに達していた。サンデッキやパラソルがぎっしり並び、スタッフはマリンロデオの順番待ちのお客さんに声をかけるにも、探すのにひと苦労。地元の人や、他のホテルの宿泊客も、マリンスポーツめあてにムーンビーチに遊びに来ていたのだ。



1990年頃のマリンスタッフ。

Marine Sports



Marine Sports Frontier Moon Beach

昔も今も。いい大人がこぞつて遊ぶビーチなのだ。

ウインドサーフィンなど、ムーンビーチでしか遊べないメニューもあった。地元の若者たちは早朝から駐車場で待ち、マリンカウンターのオープンと一緒に申し込みをしたという。

「せっかく沖縄に来たのに、湘南みたいに混んでいるとお客様に言わされました。今でこそマリンスポーツのできるリゾートホテルも、公共のビーチも増えて、お客様の分散化が進んでいますが、当時は違いました。それで、ご宿泊のお客様にゆったり過ごしていただけのようにとナップ島を整備したんですよ」

と振り返るのは、当時マリンスタッフとして勤務していた与古田悦子さん。ナップ島は元々、モクマオウとススキが生い茂る山羊だらけの島。そこで造園スタッフが遊歩道や植栽を整備し、1984(昭和59)年夏からナップ島ツアーがスタートした。朝尾さんは言う。「今でこそ無人島へ日帰りで遊びに行くツアーやいうのも一般化していましたが、この頃はまだハシリでしたねえ」



1990年頃。
腰みのはナップ島スタッフの正装



リゾートホテルにウィンドサーフィンを初めて導入したのも、ムーンビーチだ

環境の整備は、実は海の中でも行なわれている。話は開業当時の1975(昭和50)年、海洋博開幕直前の沖縄は、オニヒトデの異常繁殖によりサンゴが多大な被害を受けていたという。そこでマリンスタッフはムーンビーチ近くのオニヒトデを駆除すると同時に、ビーチにわずかに残っていたハマサンゴの近くにサンゴの岩を入れ、漁協で販売している食用のシャコ貝を買っては海に放してきた。ムーンビーチでダイビングやシュノーケリングのツアーが始まったのは1985(昭和60)年から。

「今ではムーンビーチ沖は沖縄本島でも有数のポイントに成長しました。沖縄に生息する6種類のクマノミの全てを見るることができます」

今、沖縄で海水浴場として営業しているビーチの多くは、人工的に砂を入れて造成したビーチだ。ムーンビーチはホテル開業前から海水浴場として営業していた、本島では数少ない天然のビーチ。きちんと保全すれば、自然是蘇る力を持っているのだ。朝尾さんは言葉を続けた。

「ムーンビーチは、海で過ごすことを目的にいらっしゃるお客様も多いんです。ビーチでお客様にいかにいい時間を過ごしてもらうか。僕らが考えているのはそれだけです」



海中散歩ができるシーウォーカー



大空を飛べるパラセイリング



空中散歩が楽しめるフライボード
(2012年6月沖縄初導入)

楽園の風景を支える、ムーンビーチ農場

1977年に植えたヤシの木が、今や高さ20メートルを越える巨木になつた

初めてムーンビーチを訪れる人は、ガーデンはもちろん、建物の中でも豊かな緑がある風景に驚くだろう。中には「緑に圧倒された」と感想を寄せるゲストもいるという。エントランスのガジュマルの木はもちろん、風にそよぐアレカラシや、吹き抜けの空間全体を緑で覆うポトスの葉は、ムーンビーチの象徴的存在。ガーデンに咲き乱れる色とりどりの花、ビーチに影を落とすココヤシの木、あちこちで見るブーゲンビリア…これらはすべて、造園担当スタッフが丹精込めて育てたものだ。



(左)リゾート気分を盛り上げるココヤシの木。今は2世代目の木もある
(右上)若い木を植えたばかりの頃 (右下)重機を使って植樹



Moon Beach Farm

れで、手を焼きました。幹の中に虫が入つていって、芯の部分を食べるから、やがて枯れてしまつて厄介なんです。最初は早朝にカツバを着て薬を散布していましたが、殺虫剤の散布は地球にもやさしくない。結局、ヤシの木一本一本を丹念に観察して幹に開いた穴を探し、一つひとつに針金を突っ込んで手作業で駆除するという方法を取りました」と語るのは、造園担当34年目になる村吉政清さん。ヤシの実が落下しないよう、ネットをはるなどの工夫も講じる。

ホテルから徒歩2分の距離にある自社農場は約1800坪。そのうち700坪をハウスが占めている。保有する品種は、ブーゲンビリアなら20種類以上全6000鉢。ハイビスカスは120種類、ブルメリアは105種類にもおよび、ヤシは12種類も栽培しているという。

「ホテルのほうに時々鉢もののレンタル専門業者さんが営業に来ますが、農場に案内すると、驚いて引き返したり、逆に



ホテルムーンビーチの敷地から徒歩2分の場所にある、ムーンビーチ農場の温室

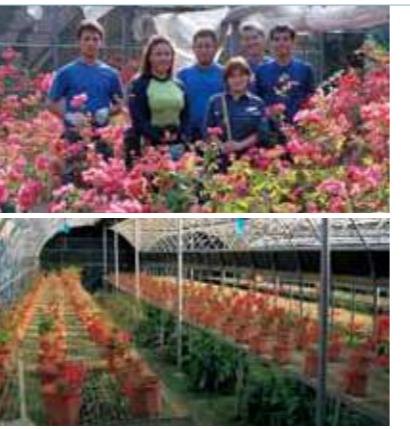
Barm

『栽培技術を教えてください』と言わ
れることもあります』

と村吉政清さんは笑う。

お客様にはトロピカルなイメージ
の花が喜ばれます。でもやはり気候
風土に合った沖縄の在来種が台風に
も強い。だから接ぎ木をしたり、遮光
や温度調整をして花をキレイにもた
せるように工夫します』

と言うのは造園担当歴26年目の村吉
政勝さんだ。ムーアンビーチの館内に
は常時約1500もの鉢が置かれて
いる。バックヤードである農場には、
その5倍は予備を用意する。常に様
子を見ながら「元気がなくなった鉢
は下げ、フレッシュなものに入れ替
える。ホテルで日陰に置く鉢は、農場
でも日陰で育てる。直射日光の当た
る場所に置くものは、直射日光の中
で育てる。総勢9名のスタッフが、表
側のホテルとバックヤードの農場を
行き来しながら目配りをする。



(上)造園スタッフ (下)挿し木で植えるブーゲンビリア



お客様に、
気持ちよく
深呼吸して
いただけるよう



赤くて小ぶりな在来種は方言で「アカバナー」



(上左)大輪のものは外来種が多い
(上右)ハウスで大きく育ったヤシの木
(下左)元気のない鉢は農園で養生させる
(下右)買って来た苗より、種や挿し木から育て上げた木は
強いのだという

「僕ら自身もあちこちに植物を見に行つたりして勉強します。研究者や園芸農家、愛好家の方々と情報交換をしたり、みんな好きなものを植えながら、管理技術を上げていった面もある。ムーアンビーチの癒しを支えているのは、自分たちだと思ったい。でも、まだまだですよ。一つひとつ勉強しながらですかね」



普段は裏方の造園スタッフ。直接
ゲストに接することは少ない。だが
ガーデンや館内で作業をしている
と、声をかけられることもあるとい
う。村吉政清さんは言葉を続けた。
『本土ではあまり見ない種類の植物
を『これは何ですか?』と聞かれた
り、「緑がいっぱいだね」と声をかけ
られたり。ガーデニングがお好きな
お客様は、農園まで見学にいらつ
しゃることもあります。ハイビスカ
スはどうやつたら花が咲きますか?
温度管理は?』とか、栽培方法を質問
されることもありますよ。植物が
好きな方とは話もはずみますね。希
望される方には挿し木用の枝を差し
上げたりもします。『花が咲きました』
とお便りをいただいたりすると、
こちらもうれしくて(笑)』

アンケートで「緑がいっぱいで癒
された」「花がきれいだった」など、さ
まざま意見をもらうことも、造園ス
タッフの励みになると村吉政勝さん
も語る。

Residential Club



ガラスの
向こうにある
新しい
ムーンビーチ

Residential Club

エントランスを入ると、まるで風が「おかえりなさい」と迎えてくれるかのよう。ガーデンやビーチはもちろん、ロビーや回廊など、ムーンビーチではどこにいても、いつも自然の風を感じられる。

亜熱帯の沖縄にも四季はある。だがその季節感は、温帯の本土とは少し異なる。冬は北からの冷たい季節風さえ防げば快適。開放感のあるムーンビーチのロビーも、冷たい北風は入りにくいよう工夫している。1年のうちで最も過ごしやすいのは、春から梅雨入り前までの「うりづん」の季節だろう。さわやかな南風が吹く頃だ。そして暑くて長い夏。

エントランスを入って左手に、ガラスで仕切られたスペースがある。緑ゆたかなロビーの一角、メインエントランスを入って左手に、ガラスで仕切られたスペースがある。2012年4月にオープンしたレジデンシャルクラブラウンジだ。これは、ムーンビーチの一部客室をリノベートしたレジデンシャルクラブルームと、宜野湾市にあるムーンオーシャン宜野湾ホテル＆レジデンスに宿泊するゲスト専用で、レジデンシャルクラブルームに滞在するゲストはチェックイン・チェックアウトとも、このラウンジで行なう。

だが強烈な紫外線を避けて日陰に入れば、島を吹き渡る風は肌に涼しく、心地よいものだ。

だが強烈な紫外線を避けて日陰に入れば、島を吹き渡る風は肌に涼しく、心地よいものだ。

エントランスを入るとき、島を吹き渡る風は肌に涼しく、心地よいものだ。

エントランスを入るとき、島を吹き渡る風は肌に涼しく、心地よいものだ。

南の島の、 わが家に、 帰るよう に

1975年、ホテルムーンビーチは分譲マンションを付設したレジデンシャルホテルとしてオープンした。当時はロングステイを想定したキッチャン付きの客室だったが、当時の日本人にはリゾートでのんびり滞在するという欧米型のスタイルはまだなじまず、コンドミニアムタイプからホテルタイプの仕様に改装せざるを得なかつた経緯がある。

オープンから37年が過ぎ、日本人の休暇の過ごし方も大きく変わった。バブル期の海外旅行ブームを経てリゾートを知る人も増え、一度の旅行で観光地をあれこれ見て回るよりも、リゾートホテルでのんびりゆったり過ごしたいと考える層が増えている。機は熟した。客室のリノベーションにあたり、ムーンビーチが考えたのは、そもそもの出発点であるレジデンシャルホテルへの回帰。ムーンビーチの提案するレジデンシャルスタイルを新しい時代のサービスで仕立て直し、旅慣れた大人がゆっくりとロングステイを楽しめる空間を創ることだった。

レジデンシャルクラブルームは3タイプ。いずれもコーヒーメーカーを備えたミニキッチンがあり、特にオーシャンビュールームはプライベート

を上げると、バスルームからバルコニー越しに海が見えるという造りになっている。前日18時までに予約をすれば、朝食を部屋ヘデリバリーストも可能。リラックスウェアのままゆつたりと朝食をとれるのは魅力だ。また、サウナ付き大浴場、ビーチパラソルやチェア、シーカヤックなど指定のマリンスポーツメニュー、パター・ゴルフ、プールとスパーソジムの利用も無料。3連泊以上のお客には、アンダーウエアのランドリーサービス(水洗い)もあるなど、ワンランク上のサービスが多い。

もちろん、滞在中はレジデンシャルクラブラウンジが自由に使える。ラウンジには、ドリンクやホテル特製スナック、パソコンコーナーも用意され、専任のコンシェルジュが対応してくれる。第二のリビングルームとして活用したい。

また、ムーンオーシャン宜野湾と共にしたサービスとして、滞在中は両ホテルのプールとスポーツジムが無料で使えるというサービスも。レジデンシャルクラブのゲストは、恩納村と宜野湾の両方に拠点を持つことができると考えれば、ロングステイの楽しみ方もさらに広がるだろう。



(左端)読書に、ティータイムに、パソコンで情報収集にと思い思いに過ごせるラウンジ。ガーデンのむこうにはビーチが広がり、ここでも自然を感じられる(左から2)レジデンシャルクラブのカウンターに用意されたソフトドリンクとホテル特製スナック(左から3)クラブスペアーム、バスルームからの眺め(右)最大4名まで宿泊できる、クラブグッシュアリールーム



シティリゾートで、
暮らすように滞在する
「ムーンオーシャン宜野湾
ホテル&レジデンス」



全室パラコニー付き。夕陽を眺めつつビールは最高だが、1年のうち最もゼイタクなのは宜野湾花火大会の夜だろう



レジデンシャルステイに特化した
ムーンオーシャン宜野湾ホテル&レジデンス。目の前には宜野湾マリーナ、徒歩で15分の距離には沖縄コンベンションセンターやトロピカルビーチなどがある宜野湾海滨公園。那覇市中心部からは車で20分と、ビジネスにも観光にも便利な立地だ。

全室ミニキッチントリビングスペースを備え、スタジオ(ワンルームタイプ)から2ベッドルーム(2LDKタイプ)まで、さまざまなタイプがある。バルコニーは海に面したビューバス。だが、単に便利なコンドミニアムならムーンホテルズの名を冠する必要はないだろう。

飲食施設はガーデンに面したオーシャングリルで、朝食からバータイムまで一日中さまざまに使えるよう、メニューにも工夫がある。ここで食事を楽しむのも、近くの大型スーパーで地元ならではの食材を買って調理を楽しむのもいい。



(左)屋外プールは夏季のみオープン
(右)リビングスペースも広々。写真は1ベッドルームタイプの部屋

屋外プールやスポーツジムもあるので、プールサイドでのんびり派も、フィットネス派もOK。ビジネスティの拠点としても、気の置けない仲間たちとの滞在にも、三世代の家族旅行にも、幅広いニーズに対応できるのが、ムーンオーシャンの提案するレジデンシャルステイだ。

つかず離れずの距離を保ちつつ、求めればサービスが受けられる快適さ。沖縄では、心底相手を思いやる真心のことを「肝心」(ルビ=ちむぐく)という。ムーンオーシャンのホスピタリティには、現代人の感覚に合わせた肝心が宿る。

Moon Ocean GINOWAN



3階以上は全室海に面したオーシャンフロントの客室。エントランスからガーデンにかけて、水と緑の空間が広がる



□ホテルムーンビーチ 〒904-0414 沖縄県国頭郡恩納村字前兼久1203番地 TEL.098-965-1020 FAX.098-965-0555 www.moonbeach.co.jp
□ムーンオーシャン宜野湾 ホテル&レジデンス 〒901-2227 沖縄県宜野湾市宇地泊558-8 TEL.098-890-1110 FAX.098-890-1120 www.moonoceanginowan.jp
□東京営業所 〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-7 NBF日比谷ビル11F TEL.03-5512-5277 FAX.03-6203-2271
□大阪営業所 〒530-0057 大阪府大阪市北区曾根崎2-5-10 梅田パシフィックビル5F TEL.06-6948-8890 FAX.06-6948-8891